

くらしナビ ♪ ライフスタイル



地域の学童保育で子どもと遊ぶ青山仁さん。子どもたちとはすっかり顔なじみだ—東京都町田市

地域社会の役に立ちたい

認知症 新時代

第4部 できることある ③

「できることは自分でやりたい」「社会の役に立ちたい」。認知症になった人の多くが、こうした思いを持ち続けている。その思いを実現させる試みが始まっている。

9月半ば、東京都町田市の自動車販売店「ホンダカーズ 東京中央・町田東店」には、履き車を熱心に洗う3人の男性の姿があった。慣れた様子で車にホースの水をかけ、布でしっかりと拭き上げていく。3人は、近くのデザイナー・ビス・DAYS B.L.G.（B.L.G.）に通う、認知症の人とスタッフだ。

●地道に提携先を探す

真剣な表情で次々と作業を進めていく青山仁さん(59)

B.L.G.には50〜80歳代の認知症の人が通い、利用者はメンバーと呼ばれる。一般的にデザイナー・ビスでは、あらかじめ決められた屋内プログラムでの提供が中心だが、ここでは洗車や青果店屋の野菜配達、

は、2年前に認知症と診断された。もの忘れはあるが、元建設作業員で体力は十分。洗車作業では、率先して力を発揮する。他の人も、スタッフに指示されるのではなく、自ら作業にあたる。開始から30分、全体的な車がピカピカになった。洗車作業は、B.L.G.が同店から請け負っている作業だ。少したが、店から謝礼も受け取っており、青山さんたちにとって、洗車は「仕事のひとつ」の意識がある。青山さん「一車が好きだし、体を動かすのも好き。それに、わずかでもお金で自分のしたことが評価されるのは励みです」と、充実した表情をみせた。

携先を探している。それでも協力が取れるのは、100件訪問して1件程度。洗車も、実現まで1年半を要した。前田さんは「活動を続ける中で、認知症への理解も徐々に浸透していくと思う。マジック?いえ、地道な取り組みです」と笑った。

「若年性」の実態調査進まず
若年性認知症の施策推進のため、実態調査を実施した、または実施予定のある都道府県は6割にとどまり、4割は予定さえないことが、認知症介護研究・研修大府センター（愛知県大府市）の調べで分かった。若年性認知症の人数を把握しているところは半数にも満たなかった。高齢者に比べ、65歳未満で発症する若年性の人向けには公的な支援やサービスが圧倒的に不足しているが、人数すら把握していないことで、さらなる施策整備の遅れにつながりそうだ。

調査は、若年性認知症の人の実態把握や支援事業実施の有無などを聞くため、大府センターが今年6月、全都道府県を対象に実施した。若年性認知症の人は、介護保険の利用も対象が限られ、サービスの中身もほとんどが高齢者向けで見合ったものが少ない。厚生労働省は2009年から、調査を実施する都道府県に助成をし、13年度からスタートの「認知症施策推進5カ年計画」では「若年性認知症施策の強化」を柱の一つとして位置づけているが、調査さえ満足に行われていないことが浮かび上がった。

調査を担当した大府センターの小長谷陽子研究部長は「実態調査を実施している地域ほど、施策が進んでいるのが見受けられる。まず調査し実態を把握することが必要だ」と指摘している。

「友人」が支える
認知症の人を友人として支え一緒に買い物や趣味を楽しむ活動も始まっている。9月中旬、市内の特別養護老人ホームに入所する雅子さん(83)は、入所後初めて、個人でショッピングセンターに出かけた。雅子さんには認知症があるが「口紅や化粧水、肌着……」と、買う物をびっしり書いてメモを大切に持ち寄り、売り場で口紅や化粧水を納得するまで試したり、目当ての化粧品を購入したりして買い物を楽しんだ。おしゃべりが好きな雅子さんは、いつも外出を希望しているが、施設では外出に付きそろう人手が少なく、実現しなかった。今回、NPO法人「認知症フレンドシップクラブ」に登録するボランティアの女性(69)が付きそろうことで、2時間ほどの外出ができた。雅子さんは「外出は立派な大きな一歩。毎日みんな外に出られるといいんだけど」と目を潤ませた。

厚生労働省は、地域での認知症への理解と支援を広げることを目的に、2005年から市民対象の認知症の基礎講座を実施。6月末現在で、517万人を超える「認知症サポーター」を養成した。しかし、認知症の人とサポーターを結びつける仕組みや機会までは設けておらず、実際の支援につながらない地域もある。そこで、認知症フレンドシップクラブの町田事務局では、サポーターを対象に、認知症の人とのコミュニケーション方法をポイントを置いた独自の講座を実施。修了者には、認知症の人や家族と交流する機会を紹介し、実際に暮らしの場面で認知症の人を支える。「サポ友」を養成している。現在「サポ友」には20人が登録。7人の認知症の人が利用している。ゴルフや映画、喫茶店でお茶を楽しむなど、本来のやりたいことや趣味を継続する支えになっている。

同クラブ町田事務局の松本礼子さんは「サポ友は、市民が暮らしの延長で少しずつ支えていく仕組み。だからこそできることもある。小さな取り組みの積み重ねが、認知症になっても安心して暮らせる街づくりにつながるのでは」と話す。【細川貴代、写真も】

たやす加Bをとをし

智子

☑ 連載の感想やご意見をどうぞ。〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞くらしナビ「認知症新時代」係へ。メールはkurashi@mainichi.co.jpへ